



“宝”を宿す“手紙”  
IIコリント 4-7~15（要旨）  
説教者 原田憲夫

聖書-創世記は語ります。私たち人間は万物の創造者である神によって土のちりから造られたこと、また、その神に対して罪を犯した人間はその荒れた地を耕し、そこから生じたものを食べて生きること、そして再びその土に帰っていくことを。

この「土の器」という言葉は、その大きな脈絡の中から私たちに語りかけています。

### [1] 「土の器」

#### (1) 「役目-目的性」

「土の器」には、それぞれ保存、運搬等の役目が求められます。すなわち「土の器」は、造り手の意に添う役目を果たす時、その存在自体が輝きます。\*エペソ 18・4-6, ロマ 9・19-24

言い換えれば、「土の器」である私たちの人生の意味や生きがいはその目的性にかかっているのです。

#### (2) 「脆弱性」

「土の器」は「もろく壊れやすい」ものです。日常生活ではダメだ、いらないと否定されることも度々です。

パウロは「私たちは四方八方から苦しめられますが...」(8)と表現しましたが、私たちの場合、その脆さはしばしば自分の信仰に疑念を抱くという形で現れます。

▶ 私たちが神の手による「土の器」であることを受け入れるとき、この「役目-目的性」と「脆弱性」の二つの点をしっかり心に刻んでおかなければなりません。

### [2] 「宝を土の器の中に入れていく」

#### (1) 「宝を入れている」

「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」(6)

そして、「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。」(コリ 2・3)とあるように、私たちがキリストを信じるとき、この「キリスト-宝を宿す」のです。

「土の器」と「宝」とは、不釣り合いの極みです。しかしそれがキリスト信者なのです。

#### (2) 「宝を入れている」

「宝を土の器の中に入れるかどうか」は、神の愛、恵みに対する一人一人の信仰にかかっています(13,14)。

しかし同時に、「土の器」であっても、その内側が汚れていない、清いことが大事です。

パウロは、不義の器-道具として罪に献げるのではなく、義の器-道具として神に献げるようにと強く促しています(ローマ 6・12-14)。cf. IIテモテ 2・19-21

▶ 「土の器」と「宝」を結ぶパウロは、「いつでもイエスの死をこの身に帯びている」(10)と語ります。自分自身をつねに十字架のキリストと結びつけます(Iコリント 15・31)。

▷ キリストを信じる人は、「自分を捨て、日々自分の十字架を負って、キリストに従う」(ルカ 9・23)人です。すなわち、日々キリストとともに死ぬ人は、日々キリストのいのちに満たされ生きるのです(ガラテヤ 2・20)!

### [3] キリストの御顔にある神の栄光を！

当時のキリスト信者への嘲笑、迫害といった、厳しい現実の中で、パウロは断言します。

「・・・窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」(8,9)

パウロはどのような苦難の場面でも、悲劇の場面でも、未来を捨ててはならないと語ります。

「それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。」(7b)

そうです。私たちは、「すばらしい宝を宿すキリストの手紙」なのです。

○ 「土の器」が造り主-神の「土の器」である限り、その中に「宿る宝」が「いのちの光」を放ちます。

混迷する暗いこの時代の中で、助け主-聖霊によってキリストを信じる「土の器」である私たち、あなた、そして主の教会を通して、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識-希望の光が輝き出ますように！

▷ 応答の祈り：新聖歌 254 番

